第４セッション「少数民族研究における藏彝走廊の位置づけ」

報告

藏彝走廊のチベット族と漢族

◆松岡正子氏報告に対するコメント◆

高 明潔
＜愛知大学＞

Ⅰ.「藏彝走廊」研究の位置づけについて

「藏彝走廊」は 1980 年代の初め頃に費孝通先生より提起された人文科学上の定義である。この定義が「百業待興」（すべての事業が改めて振興されることを期待する）という 1980 年代の初期に登場してきたのは、文革の革命的・政治的イデオロギの後遺症を一掃し、新しい時代に向かうこれからの民族問題をより効果的に解決するために、民族間の関係図の解明作業が必要となったうえ、その作業には新しい視野の取り入れが必要であるとされたからである。この定義は、後に費孝通先生の「中華民族多元一体論」発想の源ともなった。費孝通先生の中国社会研究、あるいは彼自身の思想体系には、政治に左右される側面があるが、藏彝走廊は、彼の思想体系を理解するための、もっとも重要なポイントの一つであるといえる。

それまでの中国の民族問題は階級闘争の問題であるという視点を打ち破るためには、民族間の関係を文化的範疇において解釈することも一つの可能性であった。そこで、民族間の融合、同化現象を重視するようになってきたのである。北部のアルタイ語文化圏の牧畜業民族集団に対し、南部のシナ・チベット語文化圏の農耕民族集団の文化に関する研究も、重視されるようになり、中でもとくに藏彝走廊とその研究は欠かせない存在となっている。それは藏彝走廊が以下の特徴を持つからである。

その一、藏彝走廊のチベット族の位置づけ

藏彝走廊における有力な民族集団の一つであるチベット族は、その 500 万あまりの総人口の約 25%が藏彝走廊に居住する。そのため、中国民族問題という全体図においては、藏彝走廊のチベット族の位置はチベット自治区のチベット族と全く異なるように見える。チベット自治区の政治・文化の担い手であるチベット族は、変化を起こしがたい、あるいは同化しがたいと見做されるのに対し、多民族の共存空間である藏彝走廊に散在しているチベット族は、変化を起こしやすい、あるいは同化しやすいと見做されている。事実、藏彝走廊におけるチベット族の内部は、かなり多様なグループに分けられていて、チベット自治区のチベット族と異になる様相が表われている。この様相がまさに多元一体におけるもっとも価値のあるモデルであると認識される。すなわち、中華という枠組みにおいて、チベット族は政治的な存在ではなく、あるいはチベット族を絶対的に政治的に捉える必要なく、文化的な存在に過ぎない、あるいは文化

的に捉えることもできる、ということが示されている。そこで、その存在を解明するための新しい視点が必要となる。

その二、藏彝走廊におけるイ族の位置づけ

藏彝走廊に分布している諸民族集団の中で、イ族の藏彝走廊における定着史は羌族についで長い。歴史的にも、人口的にも、イ族は西南地域で最も有力な民族集団であった。現在でも、総人口 780 万余りのイ族の８割がこの藏彝走廊に集中している。また、かつての西南地域は、イ族の王権を中心にした古代西南夷の天下として、中原王朝との対立史が長かった。

藏彝走廊の大半を含め、西南地域は 13 世紀までは、中原王朝の支配下に置かれず、漢文化の影響が薄かった。13 世紀半ば頃から元朝が土司制度を敷くにつれて、漢民族士兵による屯田や移民がこの地域にやってきたが、明朝の中期になっても、イ族の土司や土目の土地を借り、それら土司や土目に奉仕した「漢佃」は 43 万人あまりがいたと記録されている。その以降の西南地域においても、イ族を中心としたビルマ語系民族集団と漢民族や満州族との対立が続いた。その後、清朝の「改土帰流」推進に伴い、イ族は次第に山間部に逃げたりして、その存在はバラバラになっていった。そして 1950 年代以降、イ族もエスニック・グループに位置づけられるようになった。

イ族はこのような歴史過程を持ったにもかかわらず、新疆や内モンゴル、それにチベットという境界がはっきりとした存在とは異なって、その民族的境界が曖昧になっており、その境界を解明するのには新しい視点が必要となる。

Ⅱ．藏彝走廊研究の突破口について

藏彝走廊研究を通して、費孝通先生の「中華民族多元一体論」を理解するにしろ、民族間の関係図を解明するにしろ、私は藏彝走廊研究を行うに当たって漢文化の影響を重視するのはともかく、イ族の存在を無視してはいけないと考える。その主な理由として、前述したその二にも述べているように、藏彝走廊におけるイ族は、その歴史的影響や人口比率からすれば、文化面の影響では漢民族と同等な存在だからである。西南各地に伝えられている松明まつりや天文暦法はその代表的な例であろう。

もちろん、エスニック・グループと位置づけられるイ族とその文化は、政治的な存在とされた漢民族、主流文化という権威のある漢文化とは比べられないが、複合社会である中国の構図を解明するには、多元的視点が必要であろう。漢文化のみを柱にすると、多元的基準は立てられず、民族間の関係も上手く説明できない。たとえば、「藏彝走廊」という定義に基づいて行われた藏彝走廊研究において、中国国内の「藏彝走廊」に関する研究は、人文地理的な研究（たとえば、松岡先生がご報告で取り上げた成果はその例になる）が進んでいるが、厳密にいえば、この 20 年間ずっと同レベル（同じ状態＝同様な研究や議論を繰り返すばかり）に停滞している。その一因として、地理地勢や交通手段という物理的な制限があると考えられる。また、従来の漢文化だけを中心にして、あるいは中国史だけを正統史とする「藏彝走廊」を説明するというジャンルをいまだに打ち破ることができないからであろう。

この現状に基づいて、日本では皆無に等しい、松岡氏のような「民俗風習」研究、たとえば

「民暦」の利用から二元文化の生成、という民俗学視点による「藏彝走廊」の研究の存在は、極めて有意義的な試みであると考える。このためには、ぜひとも多大な現実的難関を乗り越えて、研究の重点を引き続いて「民族間関係」という側面においてもらいたい。そればかりではなく、自らの経験や試みから得た研究の視点や方法論からも、中国側の関連研究者に示唆を与えることができれば、その貢献はより大きなものとなるだろう。

松岡氏の報告はチベット族の暦を例にして、チベット族と漢民族との関係や文化の融合し合う現象について報告したが、ここでは、チベット族を中心とする藏彝走廊における民族間の関係を説明する際に、民俗学的視点に基づく幾つかのポイントと考えられるものを下記のようにまとめる。

ⅰ：イ族の「打冤家」のような、チベット族の民族間関係を示す用語やことわざの検出。

ⅱ：チベット族の「神話」「伝説」から他民族との関係のイメージとその変容を探る。

ⅲ：チベット族を中心とした諸民族間の親疎関係・通婚関係の状態と、親疎・通婚関係を形成した背景。

ⅳ：藏彝走廊におけるチベット族と他民族との関係の良し悪し。その関係はチベット自治区のチベット族とはどこが違うのか。

ⅴ：チベット族における民族械闘はどの民族との間に一番多かったか。現在はどのような変化が起きたか。

ⅵ：漢民族の藏彝走廊への進出時期、背景；人口とその変化；当初の社会的地位と現在との比較；現在の力関係像。

ⅶ：漢民族の社会・経済・政治的地位とその変化およびこの地域における在来民族の同一項目との比較。

ⅷ：チベット族を中心とした諸民族の漢族観や他民族観。

ⅸ：民暦を中心とする宗教や民間風俗面の多重文化混合状態。

（本コメント文はシンポジウム当日に会場に配布したメモに補足したものである）